



「できること」を集めて  
ブランド化するだけで  
は仕事は継続しない

エイブルアート・カンパニー  
は2013年、JDF被災地  
障害者支援センターふくしま  
(NPO法人しんせいの母体組  
織)の依頼により、3つの事  
業所がコラボレーションし  
たものづくりブランド  
**botanippe**(ボタニッ  
ペ)をスタートしました。参  
考としたのは南相馬市でスタ  
ートしていた南相馬ファクト  
リーというバッジづくりの協  
働プロジェクトです。

**botanippe**の特徴  
は、東京のデザインユニット  
MUTEが福島の3施設を訪  
問し、ワークショップを通じて  
商品開発したという点。それ  
ぞれの施設の長所をプロが引  
き出し、商品開発へと結びつ  
けるプロセスはこれまでに

ないもので、ワークショップの  
なかで偶然に引き出されたメ  
ンバーの創造力がそのまま商  
品へといかされています。  
看板商品であるウッドオーナ  
メントづくりでは、もともと木  
工や農作業に特化していた施  
設が木材の加工を、生産性・労  
働力が高い施設が組み立てを、  
絵や手織りの作業などクリエ  
イティブな作業が得意な施設  
がロゴデザインを担当してい  
ます。

しかし2013年秋のデ  
ビューアイベントのあとから、施  
設側の体制やコーディネータ  
の変更により事業は継続でき  
ていませんでした。



魔法のおかしが  
生まれたわけ

一方、2013年の秋、しん  
せいが中心となり魔法のおか  
し・ぼるぼろんプロジェクト



## case.4 | しんせい(福島県郡山市)

福島県郡山市にある特定非営利活動法人しんせい（以下、しんせい）は、原発事故の影響で故郷を離れて暮らす、障害のある人たちや声をあげにくい人たちの居場所づくり・就労支援を目指す拠点です。震災以後、人びとの生活の基盤をなす仕事の減少が大きな問題となっていましたが、現在では、この場所を中心福島県内の複数の福祉施設やNPOがつながり、新たな仕事が生まれつつあります。このケーススタディではしんせいのつながりから生まれた2つの仕事の現在を紹介します。

小さな力をあわせ  
る協働の仕組みづくり